

# 宮本常一

日本の写真史にその名を刻んだ大阪の偉大な写真家たち。その写真家が写し出した作品から、大阪の都市の様相を振り返る。第2回は宮本常一の《天満署と天満宮鳥居》。

はたなか・あきひろ 1962年大阪生まれ。民俗学者。編集者として『月刊太陽』のほか、荒木経惟、佐内正史、石川直樹らの写真集を手がける。著書に『天災と日本人』『21世紀の民俗学』『死者の民主主義』『廃仏毀釈』『宮本常一』『関東大震災』ほか、共著に『宮本常一と写真』がある。

## 写真を撮る民俗学者

宮本常一（1907～1981）は日本の写真史に名前を刻まれているような写真家ではなく、綿密なフィールドワークにもとづいて多

くの著作を残した民俗学者である。しかし彼には、『宮本常一写真・日記集成』（全2巻・別巻1）という大部の出版物があり、その付録で荒木経惟、森山大道といった有名写真家がオマージュを捧げている

ように、たんなるスナップを超えた技術を持っていた。

宮本は実業家・洪沢敬三が自邸に開いた私設研究組織「アチック・ミュージアム」の所員として活動していたことで知られるが、

その自己形成は大阪時代に培われたものだった。山口県瀬戸内海に浮かぶ周防大島で生まれた宮本は、15歳のとき桜宮にあった通信講習所に通うため大阪で暮らし始める。その後、高麗橋郵便局に勤務しながら大阪府天王寺師範学校に通い、泉州のいくつかの尋常小学校で教鞭をとった。戦中・戦後は堺市鳳に住み、大阪府から委嘱されて、農作物の栽培指導に注力していたこともある。

## 文字情報の混在した写真的風景

宮本は郵便局勤めの時期、釣鐘町（当時は大阪市東区、現在は同中央区）

の長屋で暮らして、大阪市中の散歩を趣味にしていた。

「ただ歩くことが好きであり、働いている人の姿や顔も見るのが好きであった。堂島川や土佐堀川に沿って歩き、さらにそのさきの安治川を川口の天保山まで歩いたこともあった。」（『民俗学の旅』）

上の写真は1959年10月13日に、大阪市北区西天満一丁目付近、堂島川べりの天満警察署前に立つ天満宮鳥居を写した一枚である。宮本は堂島川に架かる「銚流橋」の上からカメラを構えたはずだが、この川べりは、天神祭の宵宮に船を出し、神鉾を流して、御旅所を定めるための「銚流神事」が行われる。

この写真を撮影したとき、宮本は大阪を離れていたが、昔馴染みの懐かしきとともに、警察署と鳥居、さまざまな文字情報の混在という写真的風景に惹かれて、思わずシャッターを切ったにちがいない。



宮本常一《天満署と天満宮鳥居》所蔵/周防大島文化交流センター